

土建屋オヤジの与太話

はじめに

初めて投稿します。僭越ですが、近年の科学・技術に関する思うところを描いてみます。

・この世のこと ・諸行無常 ・生命

・この世のこと

この世、つまり今の世を現代と言ひ、最近のことを近代というらしい。人は世に連れなんとやらで、人の考えもその時代によって大きく異なるようである。科学技術にしても、時代の変遷により様相が全く異なる。

近代とは、いつからのことを言うのかは難しい。科学の世界では、ガリレオやニュートンの物理学が出てきた16世紀後半から17世紀頃からのことを言ひ(日本史では江戸時代の近世に区分される)いわゆるルネサンス後半からからの事とされる。また、技術史的な視点では、イギリスの産業革命が起こった18世紀後半から19世紀に入った頃からと言われ、我が日本では、明治維新からが近代と称される。

この事が、我々技術士となんの関わりがあるのか。

近代とは、戦争の時代といわれ、それも大量殺戮が行われ、それには科学技術の進展が大きく関わっている。また、その戦争の主体は国家であり近代国家たる政治の延長として起こされてきた。その国家体制は、絶対王政から帝国主義、民主主義国家体制へと変遷してきている。我々技術士がここで着目すべきは、これらが、全て科学技術の進展とセットになっている事である。

近代は、組織が緻密化するとともに、個人が前面に出てきたとも言われる。それ以前は、個人という概念はきわめて薄かった。また、それまでの個人の情報がマスメディアにより、その情報の管理がきわめて重要な政治的課題になった。そこから大衆という概念が生まれ、その政治手法として、民主主義政治体制が効果的だということになった、と考えられる。

今の民主主義は、古代ギリシャの民主主義とは似ても似つかない、また、日本近代以前に言われた“草莽の崛起一吉田松陰など”とも異なる。

この度の、新型コロナウイルス騒動は、近代に浮かび上がってきた“個人”という概念に対して考えさせられる事が多い。

・ 諸行無常

平家物語の、祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり・・・ではない。これらの情緒的なことではなく、ここでは、諸行は決して固定された同じ状態では無い、常に変化している、無常（常ならず）、という時間の存在について考えてみたい。（平家物語も、栄枯盛衰は常ならずと、時代の変遷を主題にはしているが）

時間というものは在るのか、というテーマは、古代ギリシャのアリストテレスの時代から議論されてきた。時間論に立ち入ると膨大な科学・哲学の深みにはまる事からそれには立ち入らない（別の機会に譲りたい）。ここでは、我々の存在も時の流れのその一部として生かされている、ほどの認識で理解されたい。

近代の科学技術は、進歩主義に裏打ちされて発展してきた。今日より明日は良くなるだろうという考え方である。改善、改革、構造改革などである。現代の我々は、これを当然のよい考え方と思っている。特に科学技術の進歩はそうした考え方を前提にしている。

しかしその発展は、一方で、様々な自然環境に負荷を強いて来た。近代が始まる頃には人口が 10 億人余りだった。現在世界の人口は 70 億以上になっている。人間が多すぎる。

例えば水問題。現在日本社会が利用している水のレベルを、世界的に同じレベルにしたとすると、地球上で利用できる水のキャパシティ人口は、30 億人前後らしい。

経済格差の問題が SDGs などでも問われている。継続的な発展というのがキーワードであり、格差の解消、世界の 1 人 1 人が幸せな生活、人権の尊重は重要な事だと思うが、自然環境との共生無しには、そもそも我々人類の存在そのものも許されない。

近年、地震・台風・火山・その他異常気象などの災害が頻発している。しかしこれらは、科学技術の観点から見ると、単なる自然現象でしか無い。実は、我々地球上の生命体は、こうした自然現象の恩恵を限りなく受けている。

我々は、そうした恩恵を受けている事実を忘れて、その自然現象による人間社会の損失を、“災害”と呼ぶのは片手落ちというのではないだろうか。

こうした、過去からの様々な恩恵を忘れる、又は無視をして未来志向とか進歩主義というのはゆるされる事とは思えない。近代の個人主義や平等、博愛主義などは、こうした自然環境などの時間軸が、疎かにされがちな側面があるような気がしてならない。

この度の新型コロナウイルス騒動が、個人の自由や責任、又は人権という概念が恐ろしく薄っぺらなもので在る事が白日の下に晒された。これは、近現代への警告かも知れない。近代の恩恵を、最も受けているアメリカに被害が多いのも、示唆に富んでいる。



3,11 の津波。この下にも、私の部下の家と家族があった。

右下に見えるのが
仙台空港
共同より

・生命

現代の科学技術において、最大の関心事は、生命はどこからきたのか、または何時どのようにして発生したのかということらしい。JAXA による「はやぶさ」の打ち上げもそのことと関係している。

ダーウインの進化論によって、我々の生命は、どうも神様の知的財産・特許物ではなさそうということになった。しかし、そこで人類は恐ろしいまでの知的暗闇に放り込まれた。では生命はどこから来たのか？

親のいない生命体は存在しない。ホモ・サピエンスという我々人類は、7～10万年ほど前から存在したらしいが、それでも、ある時突然この地上に湧いて出てきたわけではなさそうである。やはり、様々な生態系の条件の中で、進化という連続性の元で存在してきた。地質学的にいうと、7度ほどの絶滅期はあったものの、そのことによって全ての生命体が消滅したわけではなかった。つまり、このことは、ある時突如として生命体が湧いてきたわけではないということである。では、そのオリジンはどこにあるというのか？

現在わかっているのは、最初の生命の痕跡は、今から40億年ほど前ということらしい。しかし、それでもそれは生命が存在した痕跡であって、発生した痕跡ではない。地球は45億6千5百万年前にできたらしい。誰もみていたわけでもないのに、よくそんなことがわかるものだと思うが、それも科学技術のおかげである。こんな時間的スパンで見ると、生命とは、意外と地球ができた初期から存在したものだなと感慨する。

私という個体は、やがて死に絶え原子的なものに還元されていくだろう。しかし、今のこの自分という管理しきれない腹立たしい生命は、その40億年前からの連続物であると

思うと、どうしたわけか、途端に自分の生命が他人行儀になる。

生命は掛け替えのないものである。散々聞かされても、他の生命はともかく、自分の生命は自分のもので、放っておいてくれと思うが、以上のことを考えると、そもいかなくなる。

自分の中に湧き出る不平や他人に対する憎悪、自殺願望や嫌な奴に対する殺意は日常茶飯事である。こうした持て余し気味な自分を思うと、自分の生命が疎ましくなるのは、やはり歳のせいかもしれない。

このような自虐的な自分を救ってくれるのが、様々な美しい自然の営みである。こうした存在・彼らは決して自分とは別物ではないという共感から自ずと慈しみが湧いてくる。本来、宗教とは、そうした観念を教示するものであったろうが、近代に至って、戦争のネタにしかならなかった。(特に宗教という組織)

神々の神秘よりも、夜空の星々、愛らしい鳥や動物、果ては虫や木々に至る様々な自然の営みの中にこそ、大いなる神秘を覚えるのは私だけではないはずだ。



・与太話

以上の私のお話には、諸氏も大いに異論がおりと思われる。しかし、ここはひとつ、土建屋オヤジの与太話として聞き流していただきたい。

以上